

学生支援のための実践研修会に関する報告

¹ 榊原健太郎 ² 高田麻美 ² 福田八重 ³ 松永美輝恵 ⁴ 金子千香 ⁵ 倉山智春
⁶ 田口直子 ⁷ 山本真理子 ¹ 小堀馨子 ⁵ 大日向浩

¹ 帝京科学大学総合教育センター

² 帝京科学大学教職センター

³ 帝京科学大学医療科学部医療福祉学科

⁴ 帝京科学大学医療科学部東京理学療法学科

⁵ 帝京科学大学教育人間科学部学校教育学科

⁶ 帝京科学大学教育人間科学部幼児保育学科

⁷ 帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

A Report on Practical Study of Support Services for University Students

¹Kentaro SAKAKIBARA ²Asami TAKADA ²Yae FUKUDA ³Mikie MATSUNAGA
⁴Chika KANEKO ⁵Tomoharu KURAYAMA ⁶Naoko TAGUCHI ⁷Mariko YAMAMOTO
¹Keiko Grace KOBORI ⁵Hiroshi OHINATA

Abstract

A "Practical Workshop for Student Support Services" was held by volunteer teachers of our university for the 2nd term of the summer season (September 11th and 12th) and the spring season (March 26th and 29th) in FY2017. This paper reports on the training contents and training results of this workshop.

This workshop focused on primary means of support for student support services. Regarding primary support, it has been pointed out that support activities are often buried in daily educational activities, and a problem arises in that it is difficult to realize what corresponds to primary support. In order to overcome this problem, this workshop held repeated discussions on the case examples in which participants are paying attention to and keep in mind class practices and the nature of their involvement with students. Among items of focus, two important points were "diversity" and "fairness". That is, taking into consideration the characteristics of each student (= "diversity"), and assuring that all students receive basic support without any distinction (= "fairness"). In order to guarantee "diversity" and "fairness", it is said that what is important for faculty and staff is to hold in mind two perspectives of educational method and attitude towards students.

In this workshop, as an example of the former, the emphasis was placed on the guidance function in the class and the design and operation of the lesson with awareness of the "universal design". On the other hand, as an example of the latter, focus was also placed on creating an atmosphere in which students can easily consult with mentors and in which there is an attitude of respect for students as individuals.

キーワード：学生支援、チーム援助、一次的支援、授業実践、「多様性」と「公平性」

Keywords : student support services, team assistance, primary support, class practice, "diversity" and "fairness"

1. はじめに

2017年度、夏期（9月11日・12日）と春期（3月26日・29日）の2期にわたり、本学の教員有志による「学生支援のための実践研修会」を実施した。本報告は、本研修会の研修内容や研修成果を報告するものである。

本報告の構成は、「2. 研修計画」、「3. 夏期研修会」、「4. 春期研修会」、および「まとめ」からなる。

本研修会の研修内容や研修成果の委細については本編に譲るが、本研修会の基本的な性格について、ここで簡潔に触れておきたい。本研修会は次の三つ

を基本性格とする。すなわち、自主的な会であること（Ⅰ）、紹介制により参加者を構成すること（Ⅱ）、秘密保持の原則を重視すること（Ⅲ）、これらである。やや敷衍すれば、Ⅰは、学内委員会等の学内業務等とは区別されるものであり、広く「学生支援のための実践研修」というテーマに関心を抱く者が自発的に集い学ぶというものであり、Ⅱは現構成員のうち1名以上の紹介があれば、新たに参加を希望する者への制限等はない、というものである。また、Ⅲは、研修内容にケースワーク（ケーススタディ）を含む場合があるので、特に個人情報等についての秘密保持の原則を重視する、というものであ

表1 研修会の内容構成

日程	番号	内容	講師
夏期 (9月11日、12日)	セッション1	研修会の趣旨確認、学生支援の意見交換	-
	セッション2	本学におけるチーム援助の事例紹介	高田麻美
	セッション3	教養教育における一次的支援	榎原健太郎
	セッション4	総合討論	-
春期 (3月26日、29日)	セッション1	研修会の意義の再確認	-
	セッション2	一次的支援に関する報告 - 授業実践や学生との関わり -	高田麻美
	セッション3	安心して成長できる大学に - 授業実践や学生との関わりと一次的支援 -	福田八重
	セッション4	総合討論	榎原健太郎

(会場：帝京科学大学附属図書館・千住図書館内グループ学習室)

る。

また、本研修会は2018年度以降においても夏期と春期との2期にわたり継続的に事業活動を行なっているため、本研修会についてご興味やご関心を持たれた場合は、本報告の執筆者のどなたかにお問い合わせいただければ幸いです。

2. 研修計画

2017年度の研修会は、表1に示す通り、授業実践や学生との関わり方といった一次的支援のあり方を問う内容で構成した。検討の題材として、夏期は教養科目、春期は教職科目における一次的支援の実例を取り上げた。また、両期とも参加者の問題関心に即しつつ、学生支援に関する意見交換や討論を行なった。

3. 夏期研修会

(1) 研修内容

①【セッション1】研修会の趣旨確認、学生支援の意見交換

セッション1では、学生支援における参加者の関心事を確認した。なかでも「学生間の不仲・不和の解決に取り組んでいる事例」に参加者の関心が集中した。事例の概要は以下の通りである。

大学1年生のAは、学習意欲が高く、真面目な学生である。しかし、本人も言うように「人との距離感をつかめない」ことから友人関係をうまく構築できない傾向にある。そのような中、学生Aは「(SNSを使って)自分の悪い噂を流されている」、「自分は孤立していて誰とも話せない」と教員に訴えた。すぐに教員が、学生Aが「悪い噂を流している」とする学生B、C、Dを呼んで事実確認をしたところ、C、Dは自分たちの非を認めた。しかし、

中心的存在のBは「自分は全く悪くない。別の学生がやっているだけだ」と、助言教員に主張し続けた。学科内でも情報を共有し、教員がそれぞれの助言学生の指導、カウンセラーの介入、保護者との面談などを行なった。その後、学生Aが「Bらと、今は仲良くやっている」と言ったことから、現在のところ問題は沈静化したように思われる。

この事例の検討内容は次の通りである。

- ・被害者に共感的に寄り添うとともに、加害者への支援も必要である。
- ・助言教員のみが対応にあたるのではなく、チーム援助が重要である。
- ・ハラスメント行為に該当する場合、学内的にも、さらには法的にも対応が必要になる場合がある。

②【セッション2】本学におけるチーム援助の事例紹介

ケーススタディにつき、守秘義務の関係から内容を割愛する。

③【セッション3】教養教育における一次的支援

2日目セッション1では「教養教育における一次的支援」というテーマのもと、榎原講師から講師自身が担当する教養科目「哲学と思想」を通じて実践している一次的支援の事例が紹介された。

<説明内容>

- ・榎原講師が自身の事例紹介に先立ち、学習支援の階層や分類等について、文献(配布資料)を用いて基本知識(概念)の整理と情報共有を図った。
- ・配布された文献^{*1}によれば(図1参照)、「大学における学校心理学的な観点からの、学生のニーズに合わせた」学生支援アプローチは、段階別に、一～三次的なアプローチが存在すると説明されている。そのうちキャンパス全体(全ての学生)を対象とする支援アプローチは、一次的・予

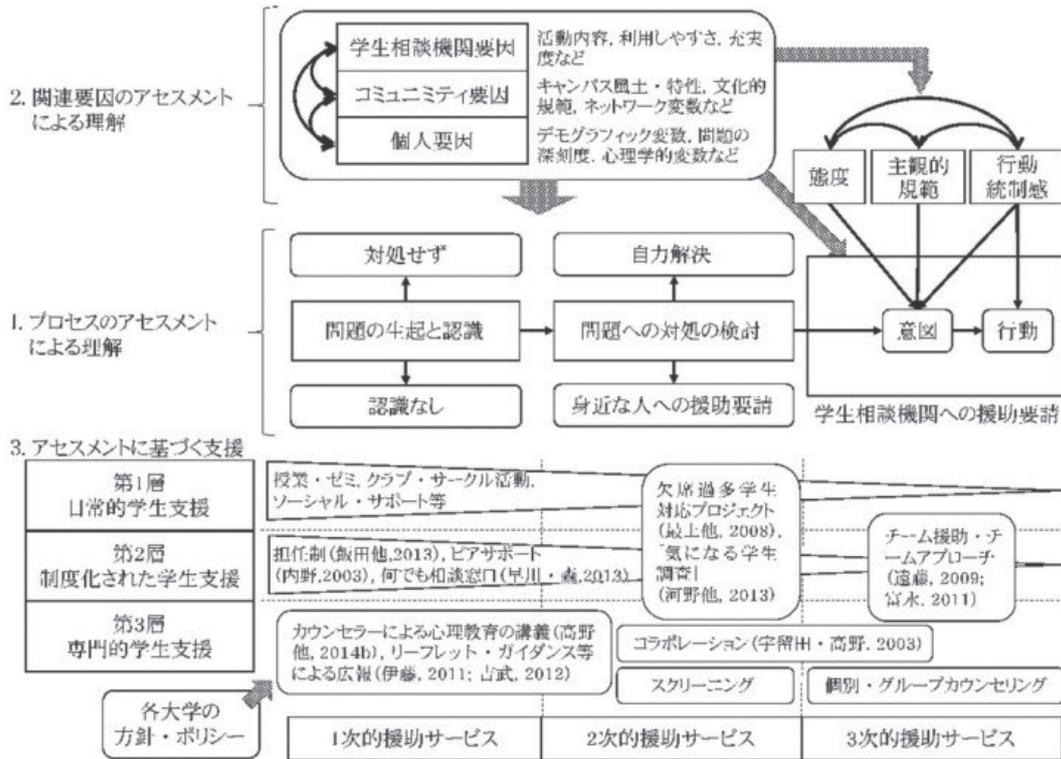


図1 学生支援のモデル (木村 (2017) より転載)

防的アプローチとされている。一方で、独立行政法人日本学生支援機構による「学生支援の3階層モデル」による「第1層」は、「日常的学生支援」と説明されている。授業を通じた日常的な学生支援は、ゼミやクラブ・サークル活動などとともにこの「第1層」に含まれるとされている。

- ・ 榊原講師が事例として示した支援内容は、授業の開講時期に、受講生全体に向けて授業シラバスにおける「授業概要・到達目標」と「授業の進め方」との関係性を十分に理解させることである。
- ・ 「授業概要・到達目標」という項目については、「哲学」を学習することの基本が、与えられた問いに対して一つの正解を効率良く引き出せるようになることではなく、むしろ各人が各人の生活や人生へ影響をおよぼしている出来事や謎の中から「自分の問い」をその都度創り出し、よりよい答えを見出そうと努力する「生きた」学問であることを説明する。他方、「授業の進め方」という項目については、講義形式と実践形式を併用して進めることを基本とすること、またその中でも実践形式が、実践的な「対話セッション」を用いた哲学のテキスト（文章）の読解、問いの作成、問いの整理・再構成、再読解といった「探究的活動」を中心とするものであることを説明する。
- ・ より具体的な授業進行は、授業毎に哲学的題材を

含んだ文章を読み（解き）、問いと推論（問答）を重ねるといって一連の作業を、「対話セッション」による探究活動を行なう者（グループ）と同探究活動の経過や内容を観察する者（グループ）に分かれて進行しながら実施し、さらに必要に応じて担当教員が探求状況についての哲学的な解説を行なうというものである。これは、榊原講師が設定した個別の到達目標（単に暗記を目標とするようなアプローチではなく）哲学的思考を適切に表現する基本動作を示すことができ、自分の考え方を（知る）ことを達成するための方法として提示しているものである。

<検討内容>

今回榊原講師が提示した授業における学習支援は、当該授業の受講生を対象としたものであるが、全受講生に向けた取り組みということから一次的かつ第1層の学習支援と捉えられる*2。

シラバスに記載のある「授業の概要（学習の目的）・到達目標」と「授業の進め方」との関係について、学生の理解を丁寧に図ることは、学生の立場からすれば学習の動機づけが明確になり、意欲的な授業参加を通じて自ずと「到達目標」達成に向けた努力ができるようになる非常に有効な学習支援の方法であると考えられる。

授業進行については、榊原講師が提示した授業開

講時の十分な説明（一次的な学習支援）がなければ、学生によっては学習動機が不十分なままに留まり、結果として、積極的に作業に参加出来ず、哲学の知識も「単なる暗記」に終わってしまいかねないと考えられる。

今回榎原講師から提示された、受講生全体に授業（科目）の目的を理解させた上であらかじめ進行方法を説明するという学習支援は、（既修者側の観点においては）忘れがちであるがどの科目でも実践できるものであるため、特に個々の学生の積極的・主体的な参加が望ましい授業においては、取り入れるべき一次的支援の一つの方法であると考えられる。

④【セッション4】総合討論

セッション4では、セッション3や夏の研修会全体に関する討論を行なった。本討論の中で挙げた質疑応答について、その概要を次に示したい。

- ・質問A：「1～3次的援助サービス」と「一～三次的支援」の違いは何か。
- ・質問Aへの応答：「1～3次的援助サービス」は学校心理学の領域において児童・生徒等を「サポート」する三階層を意味するテクニカルタームとして使用している。他方、「一～三次的支援」は、大学における学生サービスの一環としての学生を「サポート」する三階層を意味する場合広く使用していると考えられる。「1～3次」と「一～三次」が指すものは、概ね同様のものと考えてよい。
- ・質問B：「援助」にせよ「支援」にせよ、その目的は何か。
- ・質問Bへの応答：本人が自立できるようサポートを行なうことが目的である。これは、単に「卒業」を目的とすることではない。また、困難や障壁からの緊急避難や回避を目的とする「救助」とも異なるものであると考えられている。
- ・質問C：（当該授業のような）教養科目は受講者全員に対して「わかる」授業を目指すのか、受講生のうち「わからない」部分がある授業であるのは致し方ないか。
- ・質問Cへの応答：評価規準は一律であるが、授業アプローチは受講生たちの属性・特性・学力等を見極めて定める。受講生たちが当該授業以外で修得した学力や履修状況については、科目担当者としては必ずしも情報を持ち得ないため、授業内でのグループワーク等を通じて学生個々や受講者集団の個性や特性を捉えてゆく、という方法などを選択している。

・質問D：榎原講師の授業で取り残される学生はどんな学生か。またその学生はどんな評価をするのか。

・質問Dへの応答：哲学系の授業の場合、抽象的な表現や論理性といった内容に苦手な意識を持つ学生たちが存在する。適宜ケアが必要となる。15回の授業の中で、受講者本人がどのような学び方の工夫を試みたかなど、授業全体の中で受講者を見ることを心がけている。

このように総合討論は、全体としては、セッション3についての質疑応答や検討が主な内容であった。

(2) 参加者の見解

①研修会の意義と今後への期待

さまざまな問題を抱える学生が広く多く通学している状況の中、有志者が共に考えあうグループ（研修会）があることに大きな意味があると考えられる。

今回参加して気づいたのは、初参加者の動機がみな、学生の抱えている問題に悩みをもち、この研修会を頼りに参加している点である。このことから研修会の必要性の高まりがうかがえる。今回の研修会でも、発達障害を含む学生支援への対応事例や、授業における一次的支援の事例を使った話し合いは、参加者の関心が高く、これまでの研修会^{*3}で培ったものが間違いなく支援力を高めていると捉えられ、今後も学生への「援助」や「支援」について、正しい知識を備えた形で開催し、普及していく必要性があると考えた。

②一次的支援に対する考察

学生支援というと、特別に支援が必要な三次的支援のイメージが強いが、本研修会において一次的支援という考え方を学んだ。セッション1では個別に支援が必要なケースについて、参加者の意見を聞きながらより適切な支援方法を検討しつつ、「うちの学科だったら、自分だったらどんな支援が提供できるだろう」と自問自答をすることで、執筆者が特別な対応が必要なケースに出会った時の模擬練習を積むことができた。

榎原講師のセッションだけでなく、他の参加者の発言にも気づかされることばかりで、自分の知識、勉強不足を痛感させられるとともに自分自身でもっと学習支援について勉強しなければと考えさせられる機会となった。

4. 春期研修会

(1) 研修内容

①【セッション1】研修会の意義の再確認

セッション1では、本研修会の意義について議論した。検討内容は次の通りである。

- ・学生支援の中で個人プレーないしは場当たりに実践してきたことを系統立てて整理するうえで、本研修会は有意義である。
- ・合理的配慮を含む三次的支援に関心があるが、具体的な支援方法などに自信が持てず、課題が山積している。本研修会は本学の事例に基づいて議論を行なうため、他事例を考えるうえでも参考になる。事例検討の積み上げに期待したい。
- ・三次的支援に焦点が当てられがちだが、本研修会では、一次的支援や二次的支援も学ぶことができる。他方、二次的支援が必要な学生についてはその抽出が困難であるため、研修会において議論がまたれる。

②【セッション2】一次的支援に関する報告－授業実践や学生との関わり－

セッション2では、高田講師より教職・学芸員科目における配慮事項が紹介された。

<説明内容>

- ・初回授業時にシラバスの確認に時間を割き、授業の目的や内容に対する理解を促すことを目指している。
- ・振り返りシートを活用している。シートには、毎回の授業に対する意見や疑問を書き込み、それに対して担当教員がコメントを記し、学生に返却する。シートはフィードバックとして活用するほか、初回授業時には個別の配慮事項を確認する目的でも活用している。授業を受けるにあたって学生が困っている問題などないか、自由に書き込める記入欄を用意し、合理的配慮や体調面での不安、その他教員に知らせたいことを書いてもらい、配慮事項の把握に努めた。
- ・パワーポイントは、カラーユニバーサルデザインに配慮する（図2参照）。

<検討内容>

現在、大学では、ますます広く多様な学生に対する支援の力が求められている。二次的支援と三次的支援が重視される中、今回特に取り上げられた一次的援助にあたる、授業の実践方法については、学生が授業についていけなかったり、失望したりと、不満を高め、授業の理解度における二次的援助の必要

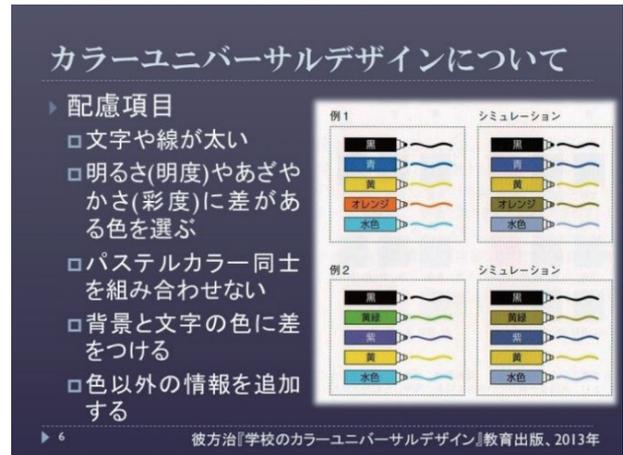


図2 セッション2の配布資料（抜粋）

性を生む原因や、学修意欲の低下に直結し、学生のリタイア率（退学率）にもつながり得る部分であり、大学全体で常に改善を意識していかなければならない。

これまで、本学において、自ら障害を打ち明けることで無事に修学を続けられた学生がいた一方、学習意欲の低下や授業理解の不十分さを抱えた学生の存在は、授業改善アンケートの結果からも読み取れるものであり、これが起点となりリタイアした学生がいるであろうことは、容易に推測できる。つまりは、一人ひとりの学生の声を聴き、抱えている問題が大きくなる前に、早期に発見し、本人が解決できるのか、支援が必要な状況なのか等、見守る環境がとて重要になっている。その中、この実践における配慮事項の確認や、各授業回のフィードバックでは、学習障害のある学生への配慮に加え、理解度を深めたい学生の質問や意見についても取り入れ、必要に応じて、全体に照会していくなど、フォローすることができるもので、有効な実践例だといえる。

③【セッション3】安心して成長できる大学に－授業実践や学生との関わりと一次的支援－

セッション3では、福田講師が教職科目で実践した一次的支援が紹介された。

<説明内容>

- ・「集団の成熟」と「居場所づくり」：教員は安心して話しかけ、質問し、関わることのできる大人であることを伝える。
- ・「学級びらき」：工夫を凝らした自己紹介で、学生の思いや願いを知る。また、互いを大切にすする第一歩を踏み出す場となる。
- ・「学生と一緒に文化をつくる」：全員で一緒に安心して発言できる「集団」を作る。

- ・学ぶ意欲の喚起、学びの深まり、集団の成熟を目指す。

<検討内容>

福田講師は、教員として学生にどう関わればよいか、具体的な事例を挙げて紹介した。福田講師の授業は、単に知識を与える場ではなく、学生自身が意欲的に安心して学ぶことのできる空間、さらには人間関係を作り上げる意図で実施されている。これは教職科目に関わらず、すべての授業で応用可能であると考えた。執筆者は、学生は授業に緊張して臨んでいることが珍しくないことを体験している。教員-学生という関係が友人同士のような関係になることはないとしても、相手を大切にする姿勢を丁寧を示すことは、学生の緊張を和らげる一つの手段となるだろう。また、学生は大学生活の中で様々な悩みや困難を抱え、ときに本人の意思ではなく留年や退学を選択しなければならない場合もある。教員一人ひとりが「安心して成長できる大学」を考えて、学生に親身に向き合っていくことは、一人でも多くの学生が悩みや困難を解決・克服し、前に進むことにつながるのではないかと考える。執筆者はこれまでに学生が退学の相談にくると、自分は最善を尽くすことができているのかと悩むこともあった。一人ひとりの悩みや困難を解決できるほど、専門的な知識も人生経験も持ち合わせていないが、「相手を大切にする姿勢」を少しずつ磨いていくことは、すぐにも出来ることなのではないかと考えられた。

④【セッション4】総合討論

セッション4では、春の研修会全体に関する討論を行なった。本討論の中で挙げた質疑応答について、その概要を次に示したい。

- ・質問A：学生支援において肝要なことは何か。
- ・質問Aへの応答：大学を通じて担保される価値は「多様性」と「公平性」に収斂されるだろう。これに関連し、セッション2で学んだ授業における「公平性」の担保が、「多様性」を包摂することへの鍵であるとの指摘があった。しかし、教育の現場では包摂性というと教員個人の努力に頼ってしまうのが現状である、との意見があった。本研修会で得られた「多様性」と「公平性」の担保が個人のエフォート管理に委ねられている現状は改善される必要があると考えられる。
- ・質問B：目の前にいる学生にどう対応したらよいか。
- ・質問Bへの応答：目の前にいる学生は様々な特

性を有しており、ある特定の科目、もしくは大学での学修に困難を抱えているかもしれないが、障害者をも受け入れて共に学ぶ本学の方針を踏まえれば、「多様性」を包摂的 (inclusive) に受け入れる、という価値観に沿っていることが確認された。

- ・質問C：一次的支援はどのように普及できるだろうか。
- ・質問Cへの応答：教員同士の授業参観（以前に本学において実施されていた）が制度として再開される際、授業参観時に一次的支援への取り組み、あるいは教員の授業への取り組みに関するミニパンフを用意しても良いのではなかろうか。

(2) 参加者の見解—学問の「多様性」と共通土台—

セッション4において、どの分野にもこれは不可欠という知識体系がある、ということはあらゆる学問分野に共通している、ということを経験した。その議論を通じて、またその後の参加者との議論を通して、執筆者は、自然系や人文社会系をはじめとする諸学問は、入り口や用いる手法は互いに違っても、最終的に一つのことを目指しており、そのことを各教員が個々の持ち場において学生に伝えることこそが「知的側面での一次的支援」と言えるのではないかと考えられる。

5. おわりに—研修会の成果と今後の課題—

本研修会は学生支援のなかでも、一次的支援に焦点をあてた。一次的支援に関しては、日常的な教育活動に埋もれることが多く、何が一次的支援に相応するのかが実感として得にくいという課題をもつことが指摘されてきた¹⁾。この課題を乗り越えるため、本研修会では授業実践や学生との関わりにおいて、参加者が配慮・留意していることを事例に議論を重ねた。そのなかでポイントとなったのが「多様性」と「公平性」という観点だった。すなわち、一人ひとりの学生の特性や配慮事項を意識しつつ (= 「多様性」)、すべての学生が同様の支援を受けられるように配慮すること (= 「公平性」) である。「多様性」と「公平性」を保障するため、教職員は教育方法と学生に相対する姿勢という二つの観点が重要だといえる。研修会において、前者の例として、授業におけるガイダンス機能を重視することやユニバーサルデザインを意識した授業設計・運営などが挙げ

られた一方、後者の例としては、学生が相談しやすい雰囲気づくりや学生を一人の個人として尊重する姿勢が紹介された。

学生支援は個々の教職員の資質に大きく委ねられているのが現状だが、互いの実践を共有することで、自らの支援の特徴や位置づけ、あるいは今後の課題を理解することが可能となる。それゆえ、今後も研修会を継続するなかで、学生支援のあり方を問うていきたい。また、上述した「多様性」と「公平性」の観点について、今後の研修会のなかでその妥当性を検証する必要があると考えている。

【注】

- * 1 本セッションにおいて配布されたのは次の文献である。木村真人：悩みを抱えていながら相談に来ない学生の理解と支援. 教育心理学年報, 56 : 186-201, 2017.
- * 2 「援助要請に基づく学生支援モデル」を描出した図1では、「第1層～第3層」という用語によって大学の「体制」の観点に基づく学生支援の（あり方の）階層性を示しており、また「第1次的～第3次的援助サービス」という用語によって「学生のニーズに合わせた援助アプローチ」の観点に基づく学生支援の（あり方の）次元性を示している。なお、本報告では、上記の両者に認められる学生支援の階層性・次元性の姿をより総合的・一般的に表現するものとして、「一次的～三次的支

援」という用語を使用する。

- * 3 「これまでの研修会」とは、2013年度から2016年度に本学において開催された自主的な研修会「コーディネーター養成研修」を指す。
 - ・樽木靖夫, 他5名：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告. 帝京科学大学紀要, 10 : 273-277, 2014.
 - ・樽木靖夫, 他8名：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告 (2). 帝京科学大学紀要, 11 : 231-235, 2015.
 - ・榊原健太郎, 他8名：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告 (3). 帝京科学大学紀要, 12 : 193-197, 2016.
 - ・高田麻美, 他6名：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告 (4). 帝京科学大学紀要, 13 : 265-270, 2017.

参考文献

1. 高田麻美, 他6名：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告 (4). 帝京科学大学紀要, 13 : 265-270, 2017.